# 現象的特性について――シューメーカーの議論に依拠して 松﨑 俊之\*

# On the Phenomenal Properties: Based on Shoemaker's View

Toshiyuki MATSUZAKI\*

\*Department of Human Culture, Faculty of Human Studies, Ishinomaki Senshu University, Ishinomaki 986-8580, Japan

序

シドニー・シューメーカーは、一連の論攷 (Shoemaker [1996b], Shoemaker [1994b], Shoemaker [2000a], Shoemaker [2000b], Shoemaker [2006]) をとおして現象的特性について考察をおこなっているのであるが、本稿では、それらの論攷における彼の議論に依拠しながらも、それに対して批判的検討を加えることで、現象的特性とは何か、その本質的なあり方について解明を試みる。

### 1 「現象的性格の問題」と現象的特性

本章の課題は現象的特性に関するシューメーカーの理解を明らかとすることにあるが、その端緒としてまずはシューメーカーの言う「現象的性格の問題」を取り上げ、この問題に対する一つの対処法である「字義どおりの投影主義」について論ずる(1.1)。ついで、「字義どおりの投影主義」とはまた違った仕方で「現象的性格の問題」に応えようとする「比喩的投影主義」に関するシューメーカーの批判的考察を詳しく検討することで(1.2)、その批判をとおしてシューメーカーがあらたに打ち出す現象的特性について考察をおこなう(1.3)。

### 1.1 「現象的性格の問題」

たとえば色彩知覚のような感覚経験においては しばしばその「現象的性格(phenomenal character)」(Nagel [1974]に倣って言うならば、「その 経験をもつとはどのようなことか(what it is like to have the experience)」) が問題となる。

シューメーカーは Shoemaker [1996b] <sup>(1)</sup>にお

いて、この現象的性格をめぐる相互に密接に関連しあう一連の問いを総称してそれを「現象的性格の問題(the problem of phenomenal character)」と名づける(Shoemaker [1996b]: 248)。この「現象的性格の問題」を構成するそれらの一連の問いのうち本稿の論脈においてとくに重要な意味をもつのは、「経験の現象的性格とその表象内容(representational content)とはいかなる関係にあるか」という問いであることから(see Shoemaker [1996b]: 248)、本稿ではまずはこの問いをめぐって考察を繰り広げることにする。

シューメーカーはこの「現象的性格の問題」に取り組むための一つの端緒として、「現象的性格は知覚された外界の対象がもつのか、それとも外界の対象に関する主観的経験がもつのか」という問いを取り上げる(Shoemaker [1996b]: 250)。

仮にこの問いに対して「現象的性格はわれわれ の主観的経験がもつものである」と答えるとする ならば、現象的性格に関するそうした理解は現象 学(すなわちわれわれの経験実相)に真っ向から 対立することになる。というのも、われわれが感 覚経験をとおして受け取る現象的性格は、たとえ ばトマトの赤さや薔薇の甘い香りといった、外界 の事物の具える特徴として経験されるものだから である (Shoemaker [1996b]: 250)。現象的性格 が実際には経験に属するという主張に固執すると したならば、少なくとも現象学(経験実相)のレ ヴェルではわれわれは現象的性格を外界の事物の 具える特徴として捉えるのであるから、われわれ の感覚経験は外界の対象を体系的に誤って捉えて いるという、一種の「錯誤理論 (error theory)」<sup>(2)</sup> を避けることは困難となる (Shoemaker [1996b]:

<sup>\*</sup>石巻専修大学人間学部人間文化学科

250)

われわれの感覚経験が、実際には経験に属す現象的性格を外界の対象のもつ特徴と捉えるこうした立場を、シューメーカーは「字義どおりの投影主義(literal projectivism)」と名づける(Shoemaker [1996b]: 250)(3)。たとえば色彩知覚の場面で、「字義どおりの投影主義」に言う「外界の対象に投影される諸特徴」を視野の一部のもつ特性として捉え返すとするならば、その主張はより明確化され説得力を増すことになるが、しかしそのとき「字義どおりの投影主義」は問題含みのセンス・データ理論(4)に通ずる道を拓くことになる(Shoemaker [1996b]: 251)。

### 1.2 「比喩的投影主義」

前節に挙げた「現象的性格は知覚された外界の対象がもつのか、それとも外界の対象に関する主観的経験がもつのか」という問いに対して、「字義どおりの投影主義」とはまた違った仕方で応ずるのが、シューメーカの言う「比喩的投影主義(figurative projectivism)」である。この「比喩的投影主義」についてシューメーカーは以下のように述べる。

これ「比喩的投影主義」は、経験のもつ特性と して理解されたクオリア<sup>(5)</sup>が、たとえば色彩が 存在するものとして知覚されるような仕方で世 界において例化される (instantiated) (6) ように さえわれわれには見えるかもしれない特性では ないということを認める。しかし、比喩的投影 主義によれば、このような仕方で世界において 例化されるようにわれわれに見える特性はそれ ぞれのクオリアと関連づけられており――ま た、経験がクオリアを例化する際には、主体は 世界において何かが例化されるものとして知覚 するが、それはクオリア自体ではなく、〔クオリ アと〕関連づけられる特性であるということに なる。実際にはこの特性は外界に位置する知覚 された対象、あるいは他のいかなる対象におい ても例化されず――そこで〔外界に位置する知 覚された対象において〕この特性が例化される ように見えるのは、知覚者がいかなる「知覚上 の〕組成をもっているか(how the perceiver is constituted) (7) ということの結果である。このことからこの立場は投影主義と見なされることになる。しかし他方で、この特性は知覚者の経験においても例化されず――このことからこの投影主義は比喩的なものであるということになる。(Shoemaker [1996b]: 251. [ ] 内は松崎による補筆。以下の引用においても同様)

上の一節に示された比喩的投影主義に関する シューメーカーの理解は以下のようにまとめられる。

比喩的投影主義によるならば、世界において例化されるようにわれわれに見えるのはクオリアそれ自体ではなく、クオリアと関連づけられる特性Xであるということになるが、実際にはこの特性Xは外界に位置する知覚された対象において例化されることはない。それが例化されるように見えるとするならば、それはあくまで知覚主体のうちにあるクオリアを外界に位置する知覚された対象に投影するという、知覚システムに固有の作用メカニズムによるのであり、他方で、この特性Xが知覚主体の経験においても例化されることはない。

この比喩的投影主義に関するシューメーカーの 理解を構成する主要な論点を箇条書きに示すなら ば以下のようになる。

(1)クオリアは経験のもつ特性であり、それはあくまで経験によって例化されるものであって、外界に位置する対象において例化されるものではない。

(2)特性 X はクオリアと関連づけられる。

(3)経験がクオリアを例化するとき、その経験主体は外界に位置する知覚された対象を(クオリアそれ自体ではなく)特性 X を例化するものとして知覚する。

(4)しかし実際には、特性 X が知覚された外界の対象において例化されることはない。

(5)特性 X が外界に位置する知覚された対象において例化されるように見えるとするならば、それはあくまで主体の具える知覚システムの独自の作用メカニズムによる。

(6)特性 X は知覚者の経験においても例化されることはない $^{(8)}$ 。

比喩的投影主義を構成するこれらの要点をもと に捉えるならば、以下に示すように、それがなぜ 「比喩的投影主義」と名づけられるのか、その理由 が明らかとなる。

要点(2)、(3)、(5)から、経験のもつ特性であるクオリアと関連づけられる特性 X は外界の対象に投影されるとの理解が導かれることになり、したがって、こうした理解を示す比喩的投影主義は(一種の)「投影主義」であると見なされることになる。

しかしその一方で、投影される対象としてのクオリアは経験において例化されると考える字義的投影主義とは異なり、比喩的投影主義によれば、要点(4)と(6)に言うように、投影される対象としての特性 X は、外界の対象において例化されることもなければ、経験においても例化されることもないため、この立場は「比喩的」なものと捉えられることになる。

以上その内容を詳しく確認してきた比喩的投影 主義には、シューメーカーも指摘するように、実 は大きな難点が含まれている (Shoemaker [1996b]: 251-2)。

第一の難点は、先に見た字義的投影主義と同様、 比喩的投影主義によるならば、われわれの知覚経 験は救い難く幻覚に冒されていると結論づけられ ることになるため、比喩的投影主義は、われわれ の知覚経験は外界の対象を体系的に誤って捉える という知覚経験上の「錯誤理論」と見なされると いう点である。

第二の難点は、比喩的投影主義によれば、たとえば「幽霊である(being a ghost)」という特性がそうであるように、何らかの仕方でわれわれの経験において表象されはするものの、いかなる対象によっても決して例化されることのないような特性が存在するということになるが、しかしながら少なくとも経験された色彩に関して言うならば、それが「幽霊である」といった特性と同種のものであるとは断じて認められないという点である。

比喩的投影主義にはこれら二つの難点が蔵されているのであるが、しかしその一方で、シューメーカーによれば、比喩的投影主義は経験の現象的性格がいかなるものであるかを理解するうえできわめて重要な論点を含むものと見なされる(Shoemaker [1996b]: 252)。シューメーカーの指

摘するそうした論点を箇条書きに示すならば以下 のようになる。

(1)知覚経験において呈示される現象的性格は、われわれの経験の表象内容がもつ何らかのアスペクトによって構成されるが、われわれが現象的性格に注意を向ける(focus on)のはそれが何についての経験か、経験の志向対象に注意を向けることによってである。

この第一の論点に関してはとくに以下の二点を 銘記しておく必要がある。

①現象的性格は、経験の表象内容それ自体によってではなく、あくまでその表象内容のもつある特定のアスペクトによってはじめて構成される。別言するならば、それが経験の表象内容のもつアスペクトであったとしても、上記のアスペクトとはまた別のアスペクトであるとするならば、そのアスペクトによるのでは現象的性格は構成されない

②「われわれが現象的性格に注意を向けるのは […] 経験の志向対象に注意を向けることによっ てである」という箇所からも明らかなように、経 験の志向対象となるその表象内容はその経験に現 象的性格を与えることになる。

(2)この表象内容に加えられる特性 X は、それが表象されることで経験のもつ現象的性格を固定することになるが、それ自体は経験の特徴ではなく、したがってクオリアではない。

(3)経験において例化されるクオリアは経験のもつ 現象的性格を固定する表象内容(のもつアスペクト)を規定する。

(4)経験の表象内容のもつすべてのアスペクトがその現象的性格を規定する特徴となるのではなく、現象的性格を規定する特徴となるのはある特定のアスペクトにかぎられる。

この点についてシューメーカーは、「スペクトル逆転」という可能的事態をもとに具体的に説明 して以下のように述べる。

ジャックとジルは互いにスペクトル逆転の関係 にあると想定してみよう〔たとえばジャックが 熟したトマトを知覚することで赤のクオリア経 験を得るのに対し、ジルは同じトマトを知覚す ることで緑のクオリア経験を得、逆にジャクが

### 現象的特性について――シューメーカーの議論に依拠して

まだ熟していないトマトを知覚することで緑の クオリア経験を得るのに対し、ジルは同じトマ トを知覚することで赤のクオリア経験を得る〕。 二人が熟したトマトを見るとき、両者の経験は その現象的性格の点で著しく異なっており、 ――現象的性格が表象内容によって規定される とするならば、ある一つの意味で彼らの経験は 表象内容において異なっていることであろう。 しかしながら私がここで言いたいのは、両者の 経験はトマトを表象しており、しかもそれが赤 い (being red) と正しく表象しているというこ とであり、この点については比喩的投影主義者 も同意することができるであろう。したがって 比喩的投影主義者はつぎのように言う必要はな いし、私はそう言うべきではないと考える。す なわち、赤さ (redness) はわれわれの経験にお いて表象されるこれらの経験に含まれるが、し かし世界において例化されることは決してな い、と。しかしながら、比喩的投影主義者は、 「われわれが経験するものとしての赤さ (redness-as-we-experience-it) | については、 先の一節のある理解にしたがえば、世界におい て例化されることは決してないと言いたくなる かもしれない。(Shoemaker [1996b]: 252)

ジャックが熟したトマトを見ることで、その経験において例化された赤のクオリアによって固定された表象内容は、赤さという現象的性格を規定し、またジルが同じ熟したトマトを見ることで、その経験において例化された緑のクオリアによって固定された表象内容は、緑という現象的性格って固定された表象内容は、各自の経験の現象的性格で規定するものと言える。その一方で、ジャスクとジルの経験が等しくトマトの「赤さ」を表象クとさルの経験が等しくトマトの「赤さ」を表象クとでいるとするならば、その表象内容はジャックとジルがそれぞれにもつ経験の現象的性格(すなかりルがそれぞれにもつ経験の現象的性格、もジャックの場合は赤さという現象的性格、の場合は緑という現象的性格)を規定するものではないと見なされることになる。

第四の論点はまさにこうした事態を指し示しているものと言えるが、ここでただちに問題となるのは、赤のクオリアによって固定された表象内容、

すなわち「われわれが経験するものとしての赤さ」 と対比される、ジャックとジルの経験に共通する 表象内容である「赤さ」とは一体いかなるものか という点である。

ここでまず確認しておくべきは、ジャックとジルの経験に共通する表象内容である「赤さ」という特性は、少なくとも直接的にはクオリア経験との関係をもたないものであることから、この特性は対象(いまの場合で言えばトマト)がそれ自体においてもつ一種の内在的特性(intrinsic property)と見なされるという点である。こうした内在的特性の候補としてもっとも蓋然性の高いものに、物体表面のもつある特定の分光反射特性といった内在的物理的特性がある(因みにチャーマーズは、たとえば赤の現象的経験よって帰属されるこうした内在的物理的特性を指して「物理的赤(physical red)」と呼んでいる。Chalmers [2010b]: 390, see also Chalmers [2010a]: 358)。

(5)「われわれが経験するような赤さ」は、われわれの経験において表象される特性の一つに数えられはするものの、世界においては例化されることのない特性であるのに対し、「赤さ」はわれわれの経験において表象され、かつ世界において例化される特性である。

(6)互いにスペクトル逆転の関係にあるジャックと ジルの間にはそれぞれの経験の現象的性格と表象 内容の点で顕著な相違が認められるものの、経験 対象の客観的本性(たとえばトマトの「赤さ」)に 照らしていずれか一方の経験が真であり、他方が 偽であるということにはならない。

すなわち、第四の論点に関して述べたように、ジャックとジルの経験が等しくトマトの「赤さ」を表象しているとするならば、両者のうちいずれか一方の経験が真であり、他方が偽であるということにはならないのである。とはいえ、ジャックとジルの経験が等しくトマトの「赤さ」を表象しているからといって、このことから直ちに両者の経験はともに真であると結論づけられるわけではない(この点については後段であらためて詳しく論ずる)。

以上、経験の現象的性格を捉えるうえで大きな 示唆を与える比喩的投影主義の議論を六点にわ たって見てきたのであるが、、このうちとくに第 五と第六の論点に関しては、比喩的投影主義の基本的立場との関係で深刻な問題を孕むものと言える。

上に見たように比喩的投影主義によるならば、本来「赤さ」は外界の対象(たとえばトマト)において例化されることはない。したがってジャックとジルがともにトマトが「赤さ」を例化していると表象するとしたならば、彼らは本来トマトが例化していることのない「赤さ」をトマトが例化していると誤表象(misrepresent)していることになるが(これは比喩的投影主義が蔵する難点として上に指摘した「われわれの知覚経験は外界の対象を体系的に誤って捉えている」というその基本理解に直接対応するものと言える)、比喩的投影主義のこうした理解は第五の論点に示された「「赤さ」はわれわれの経験において表象され、かつ世界において例化される特性である」という理解と真っ向から対立する。

また第六の論点に指摘されていたように、ジャックとジルの経験が等しく「赤さ」をトマトが例化していると表象するかぎりにおいて、確かに両者のうちいずれか一方の経験が真であり他方が偽であるということにはならない。しかしながら比喩的投影主義の理解にしたがうならば、両者はいずれも本来トマトが例化することのない「赤さ」をトマトが例化していると誤表象していることになり、したがって両者の経験が等しく「赤さ」をトマトが例化していると表象しているということになり、したがって両者の経験が等しく「赤さ」をトマトが例化していると表象しているということになり、したがってはなく、むしろ逆に両者の経験はともに偽であることを意味することになる。

こうした問題状況下で必要となるのは、シューメーカーも指摘しているように、「すべての視覚経験はこの世界のうちにある何ものももたない特性をその〔視覚経験の〕対象がもつものとして表象する」(Shoemaker [1996b]: 253) という比喩的投影主義の基本理解を斥けながらも、いかにして現象的性格を考えるうえで重要な示唆を与える比喩的投影主義の蔵する論点(とくに第五と第六の論点)を保持することができるか、その方途を探ることにある(see Shoemaker [1996b]: 253)。

この課題に応ずるには、具体的には「ジャック とジルの経験はトマトを異なった仕方で表象する

にもかかわらず、両者はいずれもそれ〔トマト〕 を誤表象することはないのはなぜか」 (Shoemaker [1996b]: 253) という問いに答える ことが必要となるが、この問いに対してシュー メーカーは「こうしたことが可能となるのは、彼 らの経験がトマトに帰属する異なった特性は関係 的特性 (relational properties) だからである」 (Shoemaker [1996b]: 253) と答える。つまりこ こで問題となっている特性(特性 X)は、トマト のもつ内在的特性とそれに起因するクオリア経験 との関係において構成される特性なのである<sup>(9)</sup>。 すなわち、ジャックとジルがそれぞれにもつ経験 が等しくトマトの具える内在的特性を表象してい るとするならば、そのかぎりにおいて両者の経験 はいずれも真であると見なされることになるが、 しかしながらその一方で、トマトの具える内在的 特性に起因するクオリア経験はジャックとジルと の間で異なることから、両者はそれぞれ自己のク オリア経験に応ずる別個の特性Xを対象として のトマトに帰属するというわけである。

この点を敷衍してシューメーカーは以下のよう に述べる。

Q1 をジャックにおいて赤 (redness) [という対 象のもつ内在的特性〕と関連づけられるクオリ ア〔赤のクオリア〕と、また Q2 をジルにおい て赤〔という対象のもつ内在的特性〕と関連づ けられるクオリア〔緑のクオリア〕とするなら ば、Q1をともなう経験との関係において構成 される関係的特性と Q2 をともなう経験との関 係において構成される〔二つの〕関係的特性が 存在することになる。ジャックの経験はトマト がこれらの関係的特性のうち前者の関係的特性 をもつものとして表象し、ジルの経験はトマト が後者の関係的特性をもつものとして表象す る。実際にはトマトはこの二つの関係的特性を もつ。いずれの特性も「赤である(being red)」 という[内在的]特性――この特性もまたジャッ クとジルの経験によってトマトに帰属される 一ではない。したがって、彼らの経験の内容 は共通のもの(いずれもトマトを赤いものとし て表象する)をもつ一方で、その内容はまた、 そのいずれかがトマトを誤表象していることに はならないような仕方で異なる。(Shoemaker [1996b]: 253)

上の一節におけるシューメーカーの説明からも明らかなように、ジャックとジルの経験はいずれも、トマトのもつ内在的特性としての「赤」(表象内容 A) とクオリア経験との関係において構成される関係的特性(表象内容 B) という二種の表象内容をもち、一方の表象内容 B に関しては両者の表象内容は異なるものの、他方の表象内容 A に関しては両者の表象内容は同一であり、仮にトマトが実際に内在的特性としての「赤」をもつとするならば、両者の経験はいずれも真であるということになる。

### 1.3 現象的特性

前節の最後に見た、クオリア経験の表象内容 B をなす関係的特性(特性 X)をシューメーカーは「現象的特性(phenomenal properties)」と名づける(Shoemaker [1996b]: 253)。本節ではこの現象的特性をめぐって考察を繰り広げることにするが、まずはその端緒として、この現象的特性をさらに特定すべくシューメーカーの加える以下の説明を取り上げることにしよう。

それら〔現象的特性〕は以下のような類のものでなければならない。すなわち、直観的に捉えるならば、二人の主体のもつ色彩経験が現象的に同じものである場合、彼らはこの種の同じ特性を知覚しており(あるいは知覚していると見なしており)、二人の主体のもつ色彩経験が現象的に異なったものである場合、彼らはこの種の異なった特性を知覚している(か、または知覚していると見なしている)。(Shoemaker [1996b]: 253)

この一節では、知覚経験と現象的特性との相関関係が指摘されているが、この点についてシューメーカーはスペクトル逆転のケースをもとにさらに詳しい説明を加える(Shoemaker [1996b]: 253)。それによれば、スペクトル逆転の関係にある二人の知覚者は、同一の客観的諸条件のもとに、まったく同一の色彩をもった事物をそれぞれ別個

の現象的特性を具えるものとして知覚し、また逆に、異なった色彩をもつ事物を同一の現象的特性を具えるものとして知覚することになるが、こうした事態は二人の知覚者がそれぞれ別個の色覚システムをもつことに起因する。

上記の点を踏まえ、シューメーカーはあらためて現象的特性は関係的特性であることを確認するとともに、それが「特定の生物(particular creatures)もしくは特定の種類の主観的構成〔色覚システム〕を具えた生物との関係において規定される 傾性的特性(dispositional properties)」(Shoemaker [1996b]: 253-4)ではないと主張する。

ここで問題となるのは、なぜ現象的特性は傾性的特性ではないとされるのか、その論拠であるが、その論拠は傾性的特性のもつ本質的性格それ自体に求められる。すなわち傾性とは対象が潜在的・可能的にもつ、ある条件(もしくは条件群)のもとである特定の事態を引き起こす(傾向的)特性であると言えるが<sup>(10)</sup>、それが本来潜在的特性であるかぎりにおいて傾性的特性それ自体が経験に現象的性格を与えることはない。

それに対しここで問題となる関係的特性は、シューメーカーも指摘しているように、「ある種の経験を現実に(actually)引き起こすことによって事物がもつ」(Shoemaker [1996b]: 254. 傍点は松﨑による)特性であることから、それ自体が経験に現象的性格を与えることになる。あらためて言うまでもなく、現象的特性の本質規定はそれがその現象的特性を表象する経験に現象的性格を与える点にあることから、現象的特性は傾性的特性であるという理解は斥けられ、上に見たある種の関係的特性が現象的特性と見なされることになるのである。

以上一種の関係的特性としての現象的特性に関するシューメーカーの基本理解について見てきたのであるが、シューメーカーは、この基本理解をもとにあらためて現象的性格とクオリアとの関係について取り上げ、さらには現象的特性とクオリアの関係について論及する。

まず現象的性格とクオリアとの関係について言うならば、シューメーカーの理解では、感覚経験のもつ現象的性格に対するクオリアの関係は、「そ

れである (being it)」(クオリアは現象的性格である) や「それをもつ (having it)」(クオリアは現象的性格をもつ) といった関係ではなく、むしろ「その構成的規定要因である (being constitutive determiners of it)」といった関係であるということになる (Shoemaker [1996b]: 255)。すなわち、クオリアは現象的性格にとってその構成的規定要因をなすと見なされるのである。

シューメーカーによれば、クオリアが現象的性格にとってその構成的規定要因をなす方式には以下の二つのものがある (Shoemaker [1996b]: 255)。

(1)部分的には(partly)、経験が当該クオリアをもつことによって経験はそれが表象するところのものを表象する。

(2)経験が表象するものの一部(part)は、こうしたクオリアを具えた経験を生み出す関係的特性としての現象的特性の例化である<sup>(11)</sup>。

クオリアが現象的性格の構成的規定要因をなすにあたっての上の二つの方式に関するシューメーカーの説明からクオリアと現象的特性との関係が明らかとなるが、その要諦は「あるクオリアをもつことによって経験はそのクオリアに応ずる現象的特性を表象する」という点にある。クオリアと現象的特性とがこのような関係にあるとするならば、「クオリアはある種の志向的特性(intentional property)ときわめて密接な関係にある」(Shoemaker [1996b]: 256)と見なされることになる(12)。

以上の議論を踏まえ、シューメーカーはクオリアと現象的特性との関係についてより具体的に以下のように説明する。

たとえばクオリア R を具えた経験がその対象をある現象的特性 (これを R\* と呼ぶ) — すなわち何かが R 経験を生み出すまさにその場合にそれがもつ特性 — をもつものとして表象するとするならば、R は、経験が R をもつことに関わる仕方で何かを R\* をもつものとして表象するまさにその場合に、その経験がもつ志向的特性と必然的に共外延的(coextensive)であることになろう。(Shoemaker [1996b]: 256)

クオリアと現象的特性との関係について論じた 上の一節の要点として以下の二点が挙げられる。 (1)あるクオリアを具えた経験は、その対象を当該 クオリアに応じた現象的特性をもつものとして表 象する。

(2)クオリアはそれを具える経験のもつ志向的特性と必然的に共外延的であり、そのかぎりにおいてクオリアは(少なくとも間接的な仕方で)志向性をもつ。

# 2 現象的特性の四候補と現象的特性であるため の四要件

前章では Shoemaker [1996b]をもとに、現象的 特性に関するシューメーカーの理解の基本骨子を 確認してきたのであるが、Shoemaker [1994b]で はシューメーカーは Shoemaker [1996b] におけ る議論を基盤としたうえで現象的特性に関して考 察をさらに一歩前進させている(13)。具体的に言 うならば、ここでシューメーカーは、現象的特性 となりうるいくつかの候補を挙げたうえで、現象 的特性であるために必要とされる諸要件に照らし てそれらについて個々に検討を加えることで、そ れらの候補のなかから現象的特性としてもっとも 相応しいものを選定するという作業に従事するの である。そうした作業をとおして展開される シューメーカーの議論は、現象的特性それ自体に ついてさらに理解を深めるものとなっていること から、本章ではシューメーカーの議論を丹念に追 うことで、現象的特性とは何か、その本質的な在 り方を究明することに努める。

### 2.1 現象的特性の四候補

シューメーカーは、前章 1.2 で論及した箇所 (Shoemaker [1996b]: 253=Shoemaker [1994b]: 27, 本稿 47-8 頁)を承けて、ここで問題となっている現象的特性をさらに特定すべく、その候補なりうるものを挙げるのであるが、そこでは互いにスペクトル逆転の関係にあるジャックとジルという二人の人物を取り上げ、ジャックにとっての特性とジルにとっての特性とのペアのかたち四つの候補が示されている (Shoemaker [1994b]: 27-8)。いま試みにシューメーカーの挙げる四つのペアにおいて問題となっている個々の特性それ自体に焦

### 現象的特性について――シューメーカーの議論に依拠して

点を絞ったかたちで、より簡潔な仕方で四つの候補を提示するならば以下のようになる。

【候補1】主体のうちにある特定のクオリアをもった経験を生み出す、対象 O のもつ特性

【候補2】ある諸条件の下で、主体のうちにある特定のクオリアをもった経験を生み出す、対象 Oのもつ傾性的特性

【候補3】ある感覚システムを具えた生物種のうちにある特定のクオリアをもった経験を生み出す、対象 O のもつ特性

【候補4】対象 O とある適切な仕方で関係する主体のうちに、いま現にある特定のクオリアをもった経験を生み出している、対象 O のもつ現勢的特性

# 2.2 現象的特性であるための四要件とそれにも とづく現象的特性の四候補に関する検討

シューメーカーはある特性が現象的特性である ための要件を提示したうえで、それをもとに前節 に示した現象的特性の四候補について個々に検討 を加えるのであるが、シューメーカーの挙げる要 件は、以下の四つのものである(なお、ここでは 色彩経験が一つのモデルケースとされている)。

【要件1】現象的特性は、われわれが色彩をもつものとして知覚する外界の対象に属しうるものでなければならない(Shoemaker [1994b]: 33)。

【要件2】現象的特性は、直観的に言って、二人の主体の色彩経験が現象的に同じものであるとき、両者はその種の同じ特性を知覚しており(もしくは知覚しているように見え)、また両者の色彩経験が現象的に異なるとき、彼らはその種の異なった特性を知覚している(もしくは知覚しているように見える)ような類の特性でなければならない(Shoemaker [1994b]: 33)。

【要件3】現象的特性は、ある対象がある特性をもたないものとして知覚しうるのは、その対象がそれと両立しえない同種の特性をもつものとして知覚することによる(たとえば、ある対象が緑であると知覚することによってその対象を赤ではないと知覚しうる)際に問題となるような特性でなければならない(Shoemaker [1994b]: 34)。

【要件4】現象的特性は、事物が知覚されない場合 にも、事物がもちうる特性でなければならない (Shoemaker [1994b]: 34)<sub>o</sub>

シューメーカーは、この四つの要件に照らして 現象的特性の候補について個々に検討を加えることで、それらの候補のなかから現象的特性として もっとも相応しいものを選定することを試みる。 とはいえ、シューメーカー自身は、それぞれの要 件のもとで四つの候補すべてを取り上げているわけではなく、要件によっては一部の候補に言及するにとどまっている。しかしながら、上記のもとですべての候補を取り上げることが不可欠であることから、以下ではシューメーカーが言及していない候補も含めすべての候補について検討をおこない候補については、「【候補 1\*】」のようにその末尾にアステリスク・マークを付すことにする)。

### (1)第一の要件

各候補に関する説明的記述からも明らかなように、そこで問題となっている特性はいずれも外界に位置する対象のもつ特性であることから、この第一の要件に関しては【候補1】から【候補4】にいたるすべての候補がこれを充たすことになる。(2)第二の要件

【候補 1\*】スペクトル逆転の可能性を認めるとするならば、互いにスペクトル逆転の関係にある二人の主体の色彩経験が現象的に同じであるからといって、必ずしも彼らが同じ特性を知覚していることにはならず、また逆に、両者の色彩経験が現象的に異なっていたとしても、必ずしも彼らが異なった特性を知覚していることにはならないため、【候補 1\*】は【要件 2】を充たさないことになる。

【候補2】スペクトル逆転の可能性を認めるとするならば、互いにスペクトル逆転の関係にある二人の主体の色彩経験が現象的に同じであるからといって、必ずしも彼らが同じ傾性的特性を知覚していることにはならず、また逆に、両者の色彩経験が現象的に異なっていたとしても、必ずしも彼らが異なった傾性的特性を知覚していることにはならないため、【候補2】もまた【要件2】を充たさないことになる。

【候補3】互いに異なった感覚システムを具えた生物種の間では、それらの色彩経験が現象的に同じ

であるからといって、必ずしもそれらが同じ特性を知覚していることにはならず、また逆に、各生物種の色彩経験が現象的に異なっていたとしても、必ずしもそれらが異なった特性を知覚していることにはならないため、【候補3】もまた【要件2】を充たさないことになる。

【候補4】ある主体のうちにいま現に現象的に同じ色彩経験を生み出している現勢的特性(たとえば、「ジャック〔またはジル〕のうちにいま現に赤のクオリアをともなった色彩経験を生み出している現勢的特性」)はスペクトル逆転者の間でも同一のものとなり、また逆に、両者にいま現に現象的に異なった現勢的特性を生み出している特性(たとえば、「ジャックのうちいま現に赤のクオリアをともなった色彩経験を生み出している現勢的特性」と「ジルのうちいま現に緑のクオリアをともなった色彩経験を生み出している現勢的特性」と「ジルのうちいま現に緑のクオリアをといる元色彩経験を生み出している現勢的特性」はそれぞれ異なることになることから、たとえスペクトル逆転の可能性を認めたとしても、【候補4】は【要件2】を充たすことになる。

### (3)第三の要件

【候補 1\*】ここで問題となる特性を物理的特性 (「物理的赤」、「物理的緑」etc.) もしくはそれを基 盤とする傾性的特性と理解するならば、そのかぎ りにおいて【候補 1\*】は【要件 3】を充たす。

【候補  $2^*$ 】ある主体が自己のうちに緑のクオリアをもった経験を生み出す傾性的特性 1 を対象 0 がもつと知覚することによって、その主体はそれとは両立しえない赤のクオリアをもった経験を生み出す傾性的特性 2 を対象 0 がもたないと知覚することになるため、【候補  $2^*$ 】は【要件 3】を充たす。

【候補3】ここで問題となる特性を物理的特性(「物理的赤」、「物理的緑」etc.) もしくはそれを基盤とする傾性的特性と解するならば、そのかぎりにおいて【候補3】は【要件3】を充たす。

【候補 4】第三の要件においては、「それをもつと (直接的に)知覚される特性とそれをもたないと (間接的に)知覚される特性とが同種の特性であ る」ことが、その基本前提をなすが、現勢的特性 はこの基本前提を保持しえない。たとえば私が緑 のクオリア経験をもつことで、対象がいま現にそ うしたクオリア経験を生み出している現勢的特性 をもつことを知覚し、そのことによってその対象がそれと両立しえない赤のクオリア経験を生み出す特性をもたないと知覚するとしたならば、後者の特性は私のうちにいま現に赤のクオリア経験を生み出している特性ではないことから、これは現勢的特性ではないということになってしまう。すなわち、このケースにおいて対象のもつ特性を対象的特性として捉えるかぎり、それをもつと(間接的に)知覚される特性とそれをもたないと(間接的に)知覚される特性とは必然的に別種の特性となってしまい、第三の要件の基本前提に反するため、現勢的特性は第三の要件を充たさないことになるのである(14)。

## (4)第四の要件

候補4

第四の要件において問題となる特性は対象それ 自体のもつ「内在的特性」であるのに対し、第一 から第四の候補に挙げられている特性はいずれも 経験主体との関係においてはじめて成立する「関 係的特性」であることから、四つの候補のすべて がこの第四の要件を満たさないことになる。

以上現象的特性の四つの候補が現象的特性であるための四つの要件を充たすか否か、すなわちその充足状況を個々に見てきたのであるが、その結果を表のかたちにまとめたものが以下の表1である。

 要件1
 要件2
 要件3
 要件4

 候補1
 ×
 △
 ×

 候補2
 ×
 ○
 ×

 候補3
 ×
 △
 ×

表 1 各候補の要件充足状況

○はその候補が当該要件を充足することを、△はその候補が 当該要件を条件付きで充足することを、×はその候補が当該 要件を充足しないことをそれぞれ示す。

表 1 からも明らかなように、四つの要件すべてを充たす候補はなく、その意味でいずれの候補も「理想的な候補(ideal candidate)」(Shoemaker [1994]: 34)とは言えないことになる。

こうした状況下でシューメーカーは、現象的特性の候補として挙げられた四つの特性をすべて候補から外すのではなく、四要件のうちのいくつかを除外することで、残った要件のもとで再度四候

#### 現象的特性について――シューメーカーの議論に依拠して

補のうち現象的特性としてもっとも相応しいものを絞り込むという戦略を採り、この基本戦略のもとで、シューメーカーはあらためて現象的特性の四要件が真にその要件となりうるものかという点について個々に検討を加える。

彼の見立てでは第一と第二の要件はそれを排除しえないことになるが、この両要件はある特性が現象的特性であるための必須の要件と見なされることから、シューメーカーの上記の見立てはきわめて妥当なものと言える。

一方、残りの第三と第四の要件についてはその 妥当性に関して議論の余地があるとシューメー カーは見るが、その理由として彼はこの二つの要 件においては経験のもつそれぞれ異なった表象内 容が混同されている点を挙げる(Shoemaker [1994b]: 34-5)。シューメーカーの言う経験のも つ二つの異なった表象内容とは、(1)現象的特性と (2)色彩ということになるが、各表象内容について さらに敷衍するならば以下のようになる。

(1)現象的特性:色彩経験は対象が感覚経験との関係において構成される現象的特性をもつものとして表象し、まさにこの特性の表象が経験に現象的性格を与えることになる。

(2)色彩:経験は対象がある色彩をもつものとして表象する。

(2)の色彩についてただちに付言しておかなければならないのは、ここに言う「色彩」はもとより現象的特性としての色彩ではなく、物体表面のもつある特定の分光反射特性といった内在的物理的特性(すなわちチャーマーズの言う「物理的赤」や「物理的緑」〔Chalmers [2010b]: 390, see also Chalmers [2010a]: 358〕)もしくはそうした物理的特性を基盤とする傾性的特性であるという点である。

あらためて言うまでもなく、経験のもつ第二の表象内容である(物理的)色彩は第三の要件と第四の要件を満たすことになる。第三の要件について言うならば、ある対象がそれと両立しえない同種の特性(物理的緑)をもつことを知覚することでその対象が欠いていることを知覚する特性(物理的赤)とはまさに(物理的)色彩に他ならず、また第四の要件について言うならば、それが知覚されない場合にも対象のもつ特性とはまさしく内

在的特性としての (物理的) 色彩なのである (Shoemaker [1994]: 35)。

経験の第一の表象内容である現象的特性とその 第二の表象内容である(物理的)色彩と混同する ことで、第一の表象内容である現象的特性も第三 の要件と第四の要件を充たさなければならないと いう誤った理解が生ずることになる。経験のもつ これら二つの表象内容を明確に区別するとしたな らば、現象的特性をあるクオリアをもった経験を 生み出す特性として理解することも可能となる。 とはいえ現象的特性と(物理的)色彩という経験 の二つの表象内容は、経験のもつ互いに独立した 分離可能なアスペクトであるわけではない。そう ではなく、「経験は現象的特性を表象することに よって〔物理的〕色彩を表象する。別言するなら ば、ある事物が呈示する (present) 現象的特性を 見る (see) ことによってその事物のもつ [物理的] 色彩を見るのである」(Shoemaker [1994b]: 35)。

上のシューメーカーの発言についてはただちに 以下の二点を補足しておく必要がある。

(1)「経験は現象的特性を表象することによって〔物理的〕色彩を表象する」とあるように、ここでは現象的特性の表象と(物理的)色彩の表象という二種の表象が問題となっているのであるが、後者の表象はあくまで前者の表象を介した間接的な表象にとどまることから、両者の違いを明確化するため、本稿では「表象(representation)」はあくまで直接的な表象を指すものとし、間接的な表象に関してはこれを「指示(reference)」と呼ぶことにする。この用語法によるならば、上の一文は「経験は現象的特性を表象する(represent)ことによって〔物理的〕色彩を指示する(refer)」と捉え返されることになる(see De ponte and Korta [2017]: 2)。

(2)物理的特性としての色彩を直接的に知覚することは不可能であることから、「その〔物理的〕色彩を見る」とはいかにもミスリーディングな表現であると言わざるをえないが、その真意は「ある事物が呈示する現象的特性を知覚ことによってその基盤をなす(物理的)色彩を認識する(cognize)」という点にあると考えられる。

経験の表象内容には相互に密接に関係し合う現 象的特性と感覚経験の(ひとつの)基盤をなす物 理的特性(物理的色彩や物理的音響等)という二種のものがあり、それらが経験を構成するその二つのアスペクトをなすという、上に見たシューメーカーの理解をここでは「経験の二重表象主義」(two-fold representationalism of experience)と名づけることにするが、この「経験の二重表象主義」をもとに、あらためて先に示した現象的特性の四つの候補のうちそのいずれが現象的特性としてもっとも相応しいものであるかを考えてみるならば、以下のようになる。

「経験の二重表象主義」にもとづくならば、第三の要件と第四の要件は本来現象的特性に関するものではなく、あくまで感覚経験の(ひとつの)基盤をなす物理的特性に関するものであることから、真に現象的特性に関する要件となるのは、第一と第二のものであるということになる。上に掲げた表1からも明らかなように、現象的特性の四つの候補のうちこの第一と第二の要件をともに満たすのは、唯一第四の候補のみであることから、この第四の候補こそまさに現象的特性と呼ばれるに相応しいものと見なされることになる。

以上の点を踏まえてここでは、現象的特性とは「対象 O とある適切な仕方で関係する主体 S のうちに、いま現にある特定のクオリアをもった経験 E を生み出している、対象 O のもつ現勢的特性」であると最終的に結論づけることにする。

#### 結

以上本稿においては、主として Shoemaker [1996b]と Shoemaker [1994b]に依拠して、現象的特性をめぐるシューメーカーの議論について批判的考察を繰り広げてきたのであるが、そこでの議論をとおして最終的に、現象的特性とは「主体のうちにいま現にある特定のクオリア経験を生み出している、対象のもつ現勢的特性」であることが確証されることとなった。

## 註

(1) これは 1993 年 10 月にシューメーカーがブラウン 大学で「ロイス講義(Royce lectures)」(アメリカの哲 学者ジョサイア・ロイス [Josiah Royce 1855-1916] を 記念して創設された講義シリーズ)としておこなった全 三回にわたる講義の最終回にあたるものであり

- (Shoemaker [1996a]: 201)、その初出は Shoemaker [1994a]である。
- (2) Mackie [1990]: 35, 48–9, see also Crane and French [2016]: 47.
- (3) シューメーカーはこの「字義どおりの投影主義」について「われわれは何らかの仕方で、実際には外界の対象に関するわれわれの経験に属す諸特徴〔すなわち現象的性格〕を外界の対象に投影する(project)」(Shoemaker [1996b]: 250. [ ] 内は松崎による補筆)と述べるのであるが、ここに示された「字義どおりの投影主義」に関する定義的理解から、シューメーカーの言う「字義どおりの投影主義」とは一般的な意味での投影主義を指すものであることが明らかとなる。なお、ここに言う「一般的な意味での投影主義」については、われわれの色彩経験に則してその基本的理論構制を提示している Maund [2019]: 8-9. 21 を参照されたい。
- (4) センス・データ理論の基本的理論構制およびそれが 蔵する問題性については、Fish [2021]: 13-34 および Huemer [2019]を参照されたい。
- (5) クオリアに関する種々の理解については松崎 [2019]: 4-5 および Tye [2015]を参照されたい。因みに、"qualia" は複数形であり、その単数形は "quale"であるが、本稿では、慣例にしたがい、単数形での"quale"を指す場合でもこれを「クオリア」と呼ぶことにする。
- (6) 「例化(instantiation)」とは一般に、ある特性が何らかの対象によって具現化されること、端的に言うならば、その対象が当該特性をもつことを意味する。たとえば目の前にあるトマトが赤いのであれば、そのトマトは「赤さ」という特性を例化しているということになる。See Orilia and Paoletti [2020]: 15-7.
- (7) ここで問題とされる「組成 (constitution)」を具体的に捉え返すならば、それは知覚主体のもつ知覚システム、あるいはより精確に言うならば、知覚システムの作用メカニズムということになる。
- (8) シューメーカーはこの比喩的投影主義に関連して「実際この見解[比喩的投影主義]にもとづくならば、われわれの経験の志向内容(intentional content)に取り入れられる「第二性質(secondary qualities)」はいかなる場所でも決して例化されることはない。それらは志向的内容のうちでのみ生き永らえる」(Shoemaker [1996b]: 251)と述べるのであるが、彼のこの発言を踏まえるならば、特性 X は外界の対象においても経験においても例化されることはなく、唯一経験の志向的内容

(=表象内容) においてのみ保持されるものであるということになる。

- (9) シューメーカーは、以下に示す当該関係的特性に関する彼の説明(Shoemaker [1996b]: 253)からも明らかなように、当該関係的特性に関してクオリア経験との関係にのみ注目しているが、トマトの具える内在的特性との関係を抜きにしてジャックとジルの経験の真性を確証することは不可能であることから、ここでは当該関係的特性においてはトマトの具える内在的特性もまたそれを構成する必須の関係項をなすと見なすことにする。(10) 傾性概念一般に関して詳しくは Choi and Fara [2014]を参照のこと。
- (11)「部分的には」や「一部は」という表現からも明らかなように、いずれの方式にも一種の限定がなさているが、これは、上述のように感覚経験の表象内容には対象のもつ内在的特性とクオリア経験との関係において構成される関係的特性との二種のものがあり、ここで問題となるのはあらためて言うまでもなく後者の表象内容であることに由来する。
- (12) クオリアに関するシューメーカーのこうした理解に照らすならば、ここに示されたシューメーカーの立場を一種の「クオリア表象主義」、すなわち「弱い意味でのクオリア表象主義(qualia representationalism in a weak sense)」もしくは「間接的クオリア表象主義(indirect qualia representationalism)」として捉えることもできよう。Cf. Shoemaker [2000b]: 266.
- (13) Shoemaker [1994] は、Shoemaker [1996b] (註(1) に記したように、Shoemaker [1996b] は、1993 年 10 月 にブラウン大学でシューメーカーおこなった「ロイス講義」の最終回にあたる)に直接繋がる、その発展形として捉えることができるが、この点は、Shoemaker [1996b] のパラグラフをそのままのかたちで転記したうえで、それを展開・深化させるかたちであらたなパラグラフを挿入するというその構成からも裏づけられる。
- (14)シューメーカー自身は第四の候補が第三の要件を充たさないことの論証としてスペクトル逆転の可能性にもとづくこれとはまた別の議論を展開している(Shoemaker [1994b]: 34)。紙幅の制約から具体的な批判的検討を加えることは控え結論だけを述べるならば、少なくとも私の見立てでは、本件に関する彼の議論はミスリーディングなもの言わざるをえないため、本稿では彼の議論を採用しないことにする。

### 参照文献

- Chalmers, David. [2010]. The Character of Consciousness. Oxford: Oxford University Press (デイヴィッド・J. チャーマーズ『意識の諸相』(上・下) 太田紘史他訳、春秋社、2016年).
- ——. [2010a]. "The Representational Character of Experience." In: Chalmers [2010]: 339–79.
- In: Chalmers [2010]: 381-454.
- Choi, Sungho and Michael Fara. [2014]. "Dispositions." The Stanford Encyclopedia of Philosophy (Spring 2014 Edition). Edited by. Edward N. Zalta. URL= <a href="http://plato.stanford.edu/archives/spr2014/entries/dispositions/">http://plato.stanford.edu/archives/spr2014/entries/dispositions/</a>>.
- Crane, Tim and Craig French. [2016]. "The Problem of Perception." Edward N. Zalta (ed.). *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Spring 2016 Edition). URL = <a href="http://plato.stanford.edu/archives/spr2016/entries/perception-problem/">http://plato.stanford.edu/archives/spr2016/entries/perception-problem/</a>>.
- De Ponte, María and Kepa Korta (eds.). [2017]. Reference and Representation in Thought and Language.

  Oxford / Oxford University Press.
- Fish, William. [2021]. *Philosophy of Perception: A Con*temporary Introduction. 2<sup>nd</sup> ed. New York / London: Routledge.
- Gendler, Tamar Szabó and John Hawthorne. [2006]. Perceptual Experinece. Oxford / New York: Oxford University Press.
- Huemer, Michael. [2019]. "Sense-Data." The Stanford Encyclopedia of Philosophy (Spring 2019 Edition), Edward N. Zalta (ed.), URL =<a href="https://plato.stanford.edu/archives/spr2019/entries/sense-data/">https://plato.stanford.edu/archives/spr2019/entries/sense-data/</a>>.
- Mackie, John Leslie. [1990]. *Ethics: Inventing Right and Wrong.* First published in Pelican Books 1977. London: Penguin Books (J. L. マッキー『倫理学――道徳を創造する』加藤尚武監訳、哲書房、1990年).
- Maund, Barry. [2019]. "Color." The Stanford Encyclopedia of Philosophy (Spring 2019 Edition), Edward N. Zalta (ed.), URL = <a href="https://plato.stanford.edu/archives/spr2019/entries/color/">https://plato.stanford.edu/archives/spr2019/entries/color/</a>.
- Nagel, Thomas. [1974]. "What is it like to be a bat?" *Philosophical Review* 83 (October): 435-50 (トマス・ナーゲル「コウモリであるとはどのようなことか」、永井均訳『コウモリであるとはどのようなことか』 勁

### 松﨑 俊之

- 草書房〔1989年〕所収、258-82頁).
- Orilia, Francesco and Michele Paolini Paoletti. [2020]. "Properties." *The Stanford Encyclopedia of Philoso-phy* (Winter 2020 Edition), Edward N. Zalta (ed.), URL <a href="https://plato.stanford.edu/archives/win2020/entries/properties/">https://plato.stanford.edu/archives/win2020/entries/properties/</a>>.
- Shoemaker, Sydney. [1994a]. "Self-Knowledge and "Inner Sense": Lecture III: The Phenomenal Character of Experience." *Philosophy and Phenomenological Research*. 54 (2): 291–314.
- ——.[1994b]. "Phenomenal Character." *Noûs* 28 (1): 21–38.
- ——. [1996a]. The First-Person Perspective and Other Essays. Cambridge / New York: Cambridge University Press.
- ——. [1996b]. "Self-Knowledge and "Inner Sense." Lecture III: The Phenomenal Character of Experi-

- ence." In: Shoemaker [1996a]: 246-68.
- ——. [2000a]. "Phenomenal Character Revisited." *Philosophy and Phenomenological Research.* 60 (2): 465-7.
- ——. [2000b]. "Introspection and Phenomenal Character." *Philosophical Topics* 28 (2): 247–73.
- ——. [2006]. "On the Ways of Things Appear." In: Gendler and Hawthorne [2006]: 461-80.
- Tye, Michael. [2015]. "Qualia." *The Stanford Ency-clopedia of Philosophy* (Fall 2015 Edition). Edited by Edward N. Zalta. URL=<a href="http://plato.stanford.edu/archives/fall2015/entries/qualia/">http://plato.stanford.edu/archives/fall2015/entries/qualia/>.
- 松﨑俊之.[2019].「表象的特性としての知覚的クオリアと美的クオリア――フレーゲ的表象主義にもとづく考察」、『東北芸術工科大学 紀要』第26号、1-18頁。